



台風が過ぎ去ったあとには「台風一過」の晴れ間が現われやすい。が、今度は晴れ間どころか、常総市を中心に惨憺（さんたん）たる爪痕を残した。氾濫から3日目の12日、現地を訪れた。市役所はまだごった返していて、駐車場の多くの車にはフロントガラスまで泥のしま模様が残っていた。一方、樹木や浸水した家々がまるで湖面に浮かぶ小島のように点在し、道路はいたるところで冠水し、あちこちで収穫目の稲穂が溺れていた。

「災害は忘れたころにやって来る」というこ

2015.9.20



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

### 台風一過

とわざがある。これだけ近代的な観測や予測技術、情報網が発達した今日、自然はあつという間にわれわれの虚をついた。確かに行政は人の生命や財産を守ることを負託されている。現行の「避難勧告・指示」の制度は、半世紀前の伊勢湾台風に伴う5000人に達する犠牲者の上に生まれた施策の一つである。

われわれはいつの間にか、安全に慣れすぎてはいないか、安全を行政に任せすぎてはいないか。人は縁あってその地に住み、その地を愛する。しかし同時にその地がもつ洪水や津波などのリスクについて、まず家族で、さらに近隣や地域でとことん勉強しておくべきではないだろうか。行政も加わるべきだ。命は一人では守れない。このたびの災禍を行政と住民との役割分担について考え直す機会にしたい。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



撮影・青山高志

2015.9.27



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

### 中秋の名月

だ我慢もできるが、月が隠れてしまうほどだと興ざめである。まさに「月に叢（むら）雲、花に風」だ。叢雲は「群れ」からきており、「層積雲」や「高積雲」を指すようだ。どちらも水滴でできた雲で、前者は2、3千呎、後者は5千呎程度が一般的である。小さな団塊状でかなり薄く、また隙間も多いので、満月が見えては隠れる。月面を過ぎる雲が月光で彩られるのも一興。

秋が深まるにつれて上空の偏西風も強まる。地球を取り巻いて、蛇行しながら吹いている西寄りの風で、その強風帯はジェット気流と呼ばれ、1万呎も上空だが、叢雲の現われる高度でも偏西風の場合が多い。月光に映える雲の種類や高さ、雲向・雲速は、上空の風を知るリアルタイム情報である。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)

こよいは中秋の名月。しかも日曜日。家族や友人たちと、中天に懸かる大きな黄金のような満月を愛でることができれば、こんな幸せはない。秋の夜の楽しみの一つである。この中秋は太陰暦にもとづくから、太陽暦では毎年日付が変わり、今年が27日、昨年は8日で、来年は15日となる。

月見の宴が盛り上がったころ、月面で餅つきをしているウサギさんたちを隠すかのように、あいにく雲が現われるときもある。時々ならま